

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#005(半田)

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#005(半田)



みなさんこんにちは。武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所の半田です。きょうは、第 2 回目の研究動画の発表ということになります。

前回の発表では、古代ギリシアの哲学者であるアナクサゴラスが語ったヌースと、ヌーソロジーの関係性について、簡単にお話をさせて頂きました。今回は、そこからもう少しだけ突っ込んで「神的知性」「能動的知性」とも訳されている、このヌースという言葉が持つ意味合いについて、プラトンとハイデガーの哲学を絡めながら、より解像度を上げて、みなさんにお話してみたいと思います。題して『プラトンとアリストテレスの調停者としてのハイデガー そして、その乗り越えとしてのヌーソロジー』です。ちょっと長いね。まあいいでしょう。よろしくお願ひします。

**Research
Announcements**

#005

プラトンとアリストテレスの調停者としてのハイデガー
そして、その乗り越えとしてのヌーソロジー

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 半田 広宣

プラトンとアリストテレスの調停者としてのハイデガー
そして、その乗り越えとしてのヌーソロジー

半田 広宣

さて、前回もお話した通り、ソクラテスが善や正義といった人間的な価値観を持ち込んで、フィシスの哲学を主観性の哲学に変えてしまったことに対して、ハイデガーは手厳しく批判を加えました。とはいっても、このフィシスの奪回をめぐるヌースという思考線を、ギリシア人たちが決して忘れ去ったというわけではありません。プラトンやアリストテレスをはじめとする、その後の西洋哲学の思考の系譜に、このヌースはその正体こそはっきりしないまでも、あたかも今は亡きフィシスが残した遺言でもあるかのようにして、哲学の歴史の中で様々な呼び名で言い換えられ、その痕跡を残していくこととなります。とにかく哲学という学問がいかにして自然は始まったのかという問題において、ずっとこの原ギリシアに呪われ続けているわけですね。

そして、この呪いを決定的にしたのがプラトンだったと言っていいと思います。プラトン有名ですよ？ 西洋哲学の歴史はプラトンへの膨大な注釈に過ぎない。これは、20世紀を代表する哲学者の一人であるホワイトヘッドの言葉です。これはプラトン抜きでは西洋の哲学史は語れないということなんですね。プラトンと言うと、みなさんの頭に真っ先に思い浮かぶものがたぶんイデア論ではないかと思います。イデア論というのは、ひとことで言えば、天上と地上というように、世界を二つに分離してイメージする考え方のことと言っていいと思います。人間の意識には五感によって捉えられる感性的な世界と、一方、数や幾何学によって、そのような観念によってしか捉えることができない形而上的な世界の二つがありますよね？ プラトンはこの両者の世界を分離して、一方を生々流転を繰り返す現象界、片やもう一方を永遠不変の真理が存在するイデア界として、存在世界を真っ二つ

に分離させたわけです。

プラトンはこの現象界とイデア界という二つの世界の関係を『ポリテイア』という著作の中で洞窟の比喩として説明しました。これも有名ですね？ この洞窟の比喩の物語は、ある意味プラトン哲学の神髄と言っていいものです。その知名度から言っても、プラトンが後世に残した最も重要なテキストと言っていいかもしれません。あのウォシャウスキー姉妹が大ヒットさせた SF 映画の傑作『マトリックス』なんかも、このプラトンの洞窟の比喩からインスピレーションを得て作られている作品なので、ご存知の方がほとんどだと思いますが、ここで改めて紹介しておきましょう。



今、洞窟の奥にある壁に向かって囚人たちが縄で縛られて座らされています。彼らの背後には松明の火が灯されているのですが、囚人たちは縛られているので、後ろが見えないわけですね？ それで松明の火の存在を知りません。松明の火と囚人たちの間には衝立があって、その衝立の後ろには、後ろを通る通路があります。その通路を木や石などでできた人間や動物の形をした人形が、操り人形のようにして、マリオネットのようにして、衝立の上に顔を出しながら運ばれていきます。そのために、これらの人形が動くと、その奥にある松明の火の光によって、囚人たちが見ている壁の方には、それらの影が映し出されてくるわけです。囚人たちには、この影の方しか見えないため、洞窟の壁に映るこの影の世界こそが世界の真実だと認識するようになります。そういう話ですよ？

そして、この話には続きがあります。こういう感じですよ。そんなある日、囚人の一人を無理やり洞窟の外へと連れ出さそうとする解放者が現れます。この解放者の手によって、自由になった囚人は、後ろが自由に縄が解けちゃうわけですから、自由に後ろが振り返ることができるようになります。そして、今まで自分が真実だと信じて見ていたものが、固定されていたのが動けるようになるわけだから、ああこういうことだったのかということで、実は松明の火に照らされた単なる影に過ぎなかったということに気づきます。そして、ついに洞窟の外にまで連れ出された囚人は、そこで天空に燦燦と輝いている太陽を目撃します。最初はその光のあまりの眩しさに、もう何にも見えませんでした。しかし、やがて目が慣れてくると、太陽こそがすべてのものを照らし出し、世界を成り立たせている存在だということを知ります。すげえなあと、たぶん囚人は思ったでしょうね？ 囚人は、自分の知ったこの真

実を、洞窟に帰って、仲間にし伝えようとするんだけど、他の囚人たちは、彼の話を決して信じようとはしませんでした。それどころかそんな話は聞きたくないと言って、中には彼を殺そうとする者まで現れました。こういう話ですね。ー

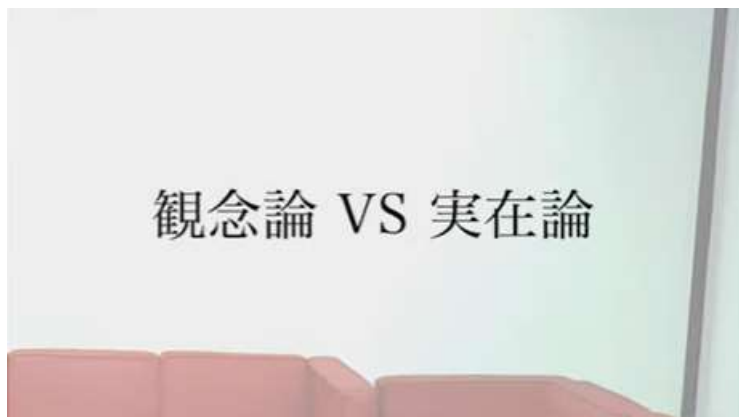
この洞窟の比喻で語られている囚人たちというのは、プラトンにとっては、哲学をしようしない無教養な人々のことを指しています。洞窟の壁とは、この無教養な人々が認識している世界のことです。それに対して、ここに登場してくるこの解放者というやつは、哲学者のことを意味していて、解放者によって連れ出された囚人が見た洞窟の外の世界というのは、真に実在するアイデアの世界であり、プラトンが言うところの真実の世界ということになります。そして、プラトンにおいては、このアイデアの世界を認識していく知性というのが、ヌースに相当します。ヌースとはアイデアを見いだす知性、そう言ってもいいでしょう。ですから、前回お話したアナクサゴラスの考え方を、この洞窟の比喻の話に当てはめるなら、洞窟の壁に映る影の世界に閉じ込められている囚人たちにとっては、世界は未だ混沌としたカオスの状態であって、そこでは秩序立てられたコスモスの世界はまだ始まっていないとも言えます。これがどういうことかわかりますか？

例えば、私たち現代人は自然界を支配している物理法則を、おそらく宇宙的な秩序の発見として理解しているのではないかと思います。しかし、もしこの物理的世界がプラトンが言うように、単に洞窟の壁に映る影のようなものに過ぎなかったとするなら、自然界に見出されるいかなる物理法則も、あくまでも影の世界の秩序であって、本当の意味での存在世界の秩序とは呼べないということになります。つまり、言い換えるなら、現在私たちが外の世界に見ている自然全般の物理法則もまた、世界のアルケー(始源)の中で活動している、カオスの宇宙の一つの表れに過ぎないということなのです。本当のフィシスとしての宇宙はまだ始まっていないということなんですね。

さて、一方プラトンの弟子でもあったアリストテレスの方ですが、彼はプラトンとは逆に、感覚界としてのこの地上の現象世界の方を重視しました。もちろんアリストテレスは、プラトンが説くアイデア世界に対して、それを否定したわけではありません。彼はプラトンよりも論理的な思考にたぶん長けた人物でもあったので、プラトンが語るアイデアが曖昧な考え方に聞こえて、たぶん受け入れることができなかったんでしょう。実際アリストテレスは、プラトンの言うアイデアは詩的な比喻に留まっていて、具体的な事実性に欠けていると批判しました。地上の具体的な事物がどのようにして、アイデアを分有しているのか、また反対にその分有されたアイデアがどのようにして一つ一つの事物として現象化してくるのか、プラトンにおいては全くその理由は明らかにされてはおらず、アリストテレスには十分に納得のいく説明になっていないように聞こえたんだと思います。

こうしてアリストテレスは、プラトンの弟子だったにも関わらず、アイデア論への批判を経て、最終的には経験的なこの現象界の立場を重視するようになります。このプラトンとアリストテレスの間におけるアイデア界を本質として見るか、現象界を本質として見るか、という対立がその後の西洋のこの哲学

史においては、観念論対実在論という形で激しい対立を見せていくことになります。



巷でよく耳にする「あなたは神を信じますか」「お前は科学を信じるか」というわけじゃなくて、宗教か科学か、精神か物質か。もしくは、主観か客観か、といったようなお馴染みの論争ですよ？ こういった論争もすべて哲学的にはこのプラトン対アリストテレスの対立に由来するものと考えていいと思います。

さあ、ここでハイデガーです。ハイデガーはこのプラトン対アリストテレスに象徴される西洋哲学の抗争の歴史に終止符を打たねばならないと考えました。西洋哲学の歴史は、結局のところ、観念の世界と実在の世界、そのどちらが本質なのかという議論に終始するだけで、単に本質存在の優位性について思考しているに過ぎないというふうに、ハイデガーは考えたわけです。そして、デカルトやカントに始まった近代哲学からニーチェに至るまで、その思考のスタイルは何も変わっていないと批判するわけです。ハイデガーにとっては実在的なものにしる観念的なものにしる、それらはあくまでも存在者の範疇でしかないんですね。その存在者たちを存在させるに至った肝心の「存在」ではないということです。この最も重要な「存在」についての思考が全くなされていない。そして、この思考されていない「存在」というものこそがハイデガーにとっては古代ギリシア人たちがフィシスと呼んでいたものだったんです。ここからハイデガーは、このフィシスとしての存在をめぐる、壮大かつ深遠な思索を彼の一生を通して行っていくことになります。

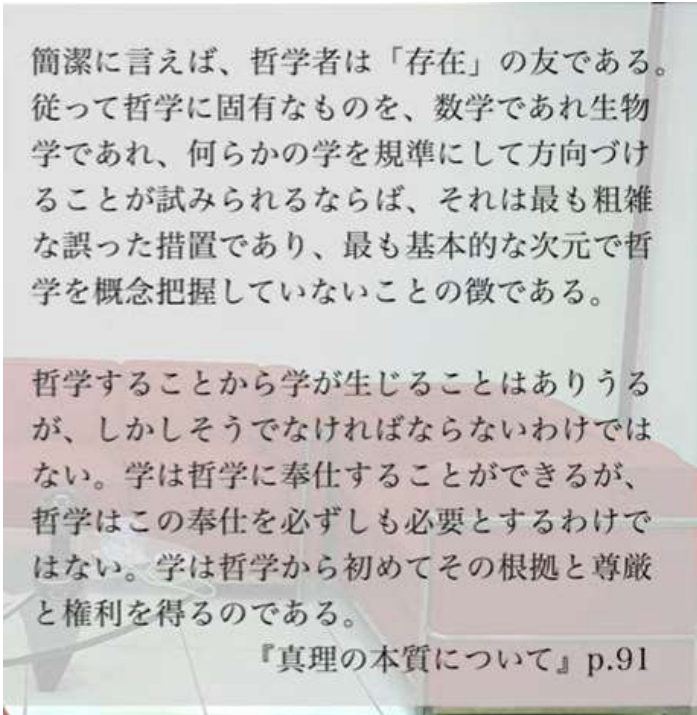
人間の実存分析から始まる彼の存在論の哲学というのは、人間の日常を頹落したもの、ある意味精神が墮落しきった状態だとみなして、その非本来的なあり方の中でニヒリズムに陥っていると考えます。ニヒリズム、怖いですね。虚無のことです。この虚無の中をさまよっている人間たちというイメージでしょうか？ そして、人間が常に他者とともに共同的に生きている事実、実存の意味を見出して、ここにおける共同性を民族と結びつけて、人間ひとりひとりの生がこの民族の共同性に救われることによるのみ、ニヒリズムからの脱却を図ることができると考えました。そして、存在の実現は、国家において生起するとまで言い切って、ウルトラファッショ的な思想へと変貌していきます。この辺りのハイデガーの存在をめぐる思考は、ニューソロジーが考える存在のビジョンからすると、かなりボタンの掛け違いをしてしまったかのようで、正直言ってついていけません。元々原自然として

のフィシスへの回帰を目指す哲学がですよ。どうして民族や国家などといった、ある意味自然とは真反対の位置にある人間的なものへと向かわなければならなかったのでしょうか？ もちろんハイデガーが生きたあの時代のドイツでの政治的状況というのが大きく影響を与えていることは確かだとは思いますが、おそらく後にはもう1つの要因として哲学の無条件性とも言うのかな？ 哲学者にはありがちな哲学への過信があったのではないかと思われます。

ハイデガーは『真理の本質について』という著書の中で、次のように言っています。ちょっと持ってきましたので読んでみますね。

「簡潔に言えば、哲学者は『存在』の友である。従って哲学に固有なものを、数学であれ生物学であれ、何らかの学を基準にして方向づけることが試みられるならば、それは最も粗雑な誤った措置であり、最も基本的な次元で哲学を概念把握していないことの徴である。

哲学することから学が生じることはありうるが、しかしそうでなければならぬわけではない。学は哲学に奉仕することができるが、哲学はこの奉仕を必ずしも必要とするわけではない。学は哲学から初めてその根拠と尊厳と権利を得るのである。」



簡潔に言えば、哲学者は「存在」の友である。従って哲学に固有なものを、数学であれ生物学であれ、何らかの学を基準にして方向づけることが試みられるならば、それは最も粗雑な誤った措置であり、最も基本的な次元で哲学を概念把握していないことの徴である。

哲学することから学が生じることはありうるが、しかしそうでなければならぬわけではない。学は哲学に奉仕することができるが、哲学はこの奉仕を必ずしも必要とするわけではない。学は哲学から初めてその根拠と尊厳と権利を得るのである。

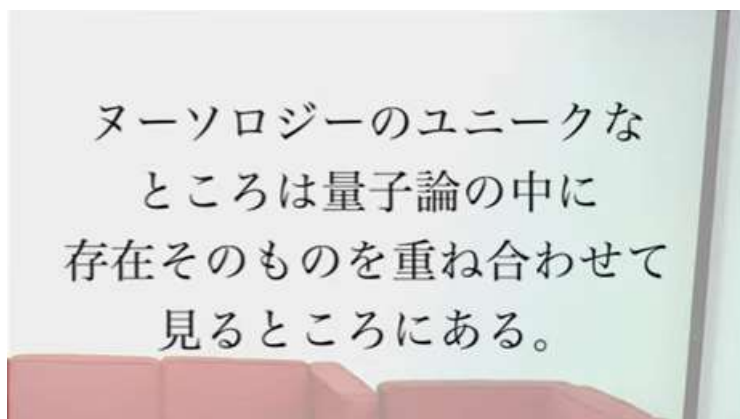
『真理の本質について』 p.91

ふえ〜って感じですね。今読んだ通りですよ。ハイデガーに限らず、現代の哲学者たち伝統的に哲学者全般がそうだと思うんですが、一般に哲学的思考の内容を規定する際に、実証科学に頼ることを嫌いますよね？ 人間の思考とは何かという問題までを射程に入れて考える哲学が、人間の思考によって生み出された科学の知識に裏打ちされたのでは本末転倒だというふうに考えるわけです。つまり、哲学はいかなる他の学識にも影響されることなく、哲学的思考そのものの中で思考されねばならないということなのでしょう。ここには哲学がすべての学問のうちで最も崇高な学問

であり、哲学によってすべての学が基礎づけられなければならないといったような、哲学者特有の自負があります。しかし、どうでしょうかね？ これは本当でしょうか？ 科学主義とコンピュータ技術が猛威を奮い、社会全体が加速度的にデジタル化されていく現代という時代、哲学そのものが絶滅瀕死となりつつあることはみなさんもよくご存知のことでしょう。

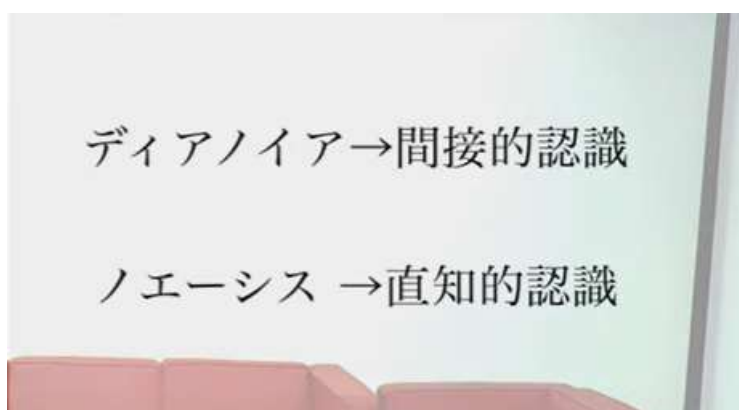
きょうご紹介したプラトンは愚か、20 世紀最大の哲学者と言われたハイデガーの哲学にしても、今の時代オカルト扱いする知識人たちもたくさんいます。世間で哲学者として名が通っている人たちです。その例外ではないんです。英米の分析的な手法が主流となっている現代の哲学研究では、プラトンのイデア論さえまともに研究されているかどうか怪しいですね。それが実情でしょう。このような現代という哲学なき時代において、ハイデガー哲学の念願でもあったフィシスの思考を復活させるためには、僕なんかは科学主義を乗り越えた上での、もはや哲学でも科学でもないような新しいハイブリッドな思考様式が必要なんだろうと思うわけです。ニューソロジーというのは、まさしくそのような全く新しい別の思考を作ろうとしている思想といっても過言じゃないと思います。

こう言ってもよくわからないでしょうから、ここで簡単にニューソロジーのコンセプトというのを少しだけ紹介しておきましょう。ニューソロジーの考え方がユニークなところは、現代科学のある意味最先端の分野とも言える量子論の中に、先ほどから説明してきた存在そのものを重ね合わせて見るというところにあります。

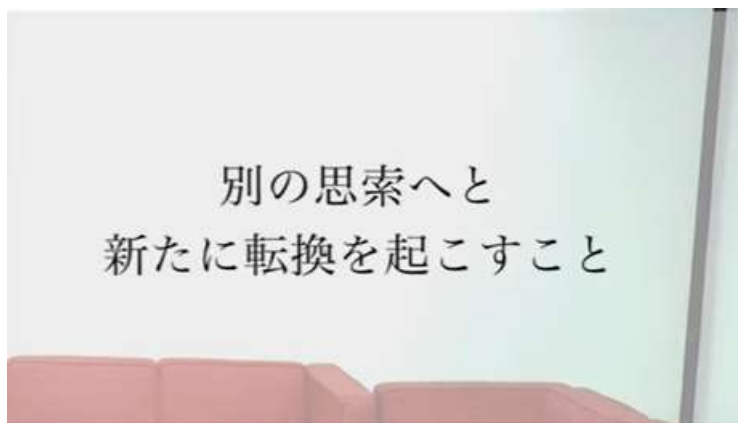


通常物理学のように、量子を単なる物理的対象とは見ない、つまり、存在者としては見ないということです。つまり、ニューソロジーは、量子力学や場の量子論が扱っている素粒子の世界というもの、先ほどの言い方をすれば、洞窟の壁に映った影、いや、この場合は時空と言っていいでしょうね。私たちの洞窟というのは、もう時空のことですから。この時空に映し出された、私たち人間の意識を裏で稼働させている、超越論的なものの影としてみなすんです。そして、この超越論的な存在、超越論的なものをハイデガーが言うところの「存在」として理解するところに、ハイデガーが果たせなかった、あのフィシスへの帰還の鍵があると考えているということです。私たち人間自身が素粒子へと変身し、自然の内部、その内在性へとダイレクトに侵入していくための思考、そういうものをニューソロジーは作り出していこうとしています。先ほども言ったように、プラトンが自然を実在とイデアの二

つに分離したところから、形而上学というものは始まりました。素粒子を自然界の中の物質的存在と見るなら、その精神的な側面は素粒子を記述している数学的な観念にあります。私たちの自然の基盤が現在このように物質的な概念としての素粒子と、数学的な観念としての素粒子として、美しく二つに分裂しているわけですよ。このように考えると、まさに現象と観念という分離したところから始まったとされる、形而上学の問題点が、この現代科学が行き着いた素粒子という物質の根源のあり方において、端的に表現されているということがわかります。おそらく物質概念としての素粒子にも、数学的観念としての素粒子にも、その本来性はありません。ただ、もしこの素粒子を表現している数学的観念が、全く新しい空間思考によって、私たちの実存を通して内的なものとしてイメージされてきたとしたらどうでしょうか？



物理学者たちが扱っている数学的な観念は、あくまでもプラトンの言うなら、デアノイアの範疇ですから、もしそれをノエシスへと変換することができるとしたら、そこに生まれてくるのは物質と観念とに引き裂かれる以前の何物かです。ハイデガーの存在論の文脈から言えば、それこそが存在そのものということになってきます。先ほども言いましたが、AI が加速度的なスピードで進化し、人間がますます狭いところへ閉じ込められていくこの時代、原自然としてのフィシスの思考が今ほど必要とされている時代はないかもしれません。ハイデガー風に言うならば、別の思索へと新たに転換を起こすこと。そのような別の思索のあり方を創造していくものがニューソロジーがヌースと呼ぶものだと考えて頂いていいと思います。



次回からの研究動画では、この別の思索のあり方を、過去の様々な哲学者の考え方を織り交ぜな

がら、ヌーソロジーの空間概念を通していろいろと紹介していきたいと思っています。長かったですね。では、また次回お会いしましょう。どうもありがとうございました。(28:15/28:40)(了)

Research Announcements

#005

プラトンとアリストテレスの調停者としてのハイデガー
そして、その乗り越えとしてのヌーソロジー



武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 半田 広宣

References

参考文献

I.M・ハイデガー『真理の本質について：ハイデガー全集第34巻』（1995）創文社



武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#005(半田)

(2022/05/30 uploaded)

<https://www.youtube.com/watch?v=0UnQgaWovq0>